ウイリアム、ジエームズに關する覺書

——その內的生活について——

坂本弘

一

周知のごとくジエームズの宗教觀には、他の追隨を許さない獨特なものがある。さうして、それにはやはり宗教者の境涯への深い洞察が根柢となつてゐるやうに思はれる。

かかる洞察は恐らく研究の精到のみによつて得られるものではない。何等かの天分を俟たなければならぬ。然しジエームズの場合は、單に漠然とした天分といふのではなく、それが探求と生活とをとほして出てきた、謂はば體驗の眼ともいふべきものがあつたやうに考へられのである。この點についてジエームズのより日常的な面をも斟酌し少しく所見をしるして見たいと思ふ。

二

ジエームズは思想的にきはめて寬容な雰圍氣の中に成長した。父ヘンリー、ジエームズは典型的な淸教徒であり熱烈な信仰の持主であつた。又彼は後年熱心なスエデンボルギヤンとして知られ、一時はエマスン、ソロー等とも交友關係があつた。日常親しく出入してゐた友人たちも、それぞれ獨特の風格をもち、新しい思想や運動に關心を懷くものが多かつた。

彼等の間では、一般には異端と目されてゐるものも眞摯にとり上げられ、かへつて正統の教說よりも喜び迎へられた。當時活潑に動き始めてゐた新しい思想はいふに及ばず、靈媒、透視術、メスメリズム、結晶體凝視、自

動現象等のごとき極端な心靈運動さへも、決して頭から斥けられることなく、寛い襟度をもつて語り且つ論ぜられた。何事によらず主張は主張として尊重し、これに耳を傾けるといふ風であつた。

父ジェームズを中心とするこのグループは、或意味で南北戰爭以後おのづと醸成され昂まつて行つた精神動向①を、逸くも身に感じつつあつたと見ることができる。かかる環境に少年期を過したジェームズが、どこまでも先入觀念にとらはれない不羈敢爲の精神と、事實を事實として認め重んずる謙虚な態度とを不知不識身に着け、後年期せずして上記精神動向の指導的位置に立つに至つたのも、決して偶然ではないと考へられるのである。

① 南北戰爭以後次第に複雜化富裕化した國民生活に節度を與へ、かつこれを内的に深め得るやうな新しい精神的支持要求の機運を指してゐる。J. Royce, William James and Other Essays, p. 18—9. 參照。

二

ジェームズが青年期に入つて最初に奉じた福音はストイシズムであつた。彼は最初かなり熱心にこれを信奉し、友人たちにも好んでこれを説いたと云はれる。この動機はかなり長くつづいてゐる。しかしそれは彼の倫理的精神の謂はば消極的なあらはれであつた。夙くから憂鬱症的な傾向を有してゐたジェームズは、ストイシズムを精神的支柱として、自らを護り勵まさうとしたのである。一八七六年に認められた次の告白は、かかる堅忍の精神にのみ終始することの不滿をはやくも洩らしてゐる。

『私の奉ずるストイシズムの難さは屢々私を壓する。私の宗教に對する態度は、それを進んで採るといふよりも、尊重するといふ態度である。私にはそのありかがよく分る。どれもこれもすべて駄目だつた、殘るのはあれだけだ、さもなくば殘るものは何もない、といふ時のあることが感ぜられる。しかもなほ私は、かかる時が訪れてくるまで手を觸れることなく、それをそのままにしておかねばならぬかのやうに振舞ふのだ。やがて嵐が來り吹く時、否應なくそこへ引き出されるといふことになるであらう。かく言ふ私にはたしかに正當なところがある。宗教は日々の慰藉や便宜ではないのだから。だがや

はりどこか落付かないものがあるといふことも解つてゐる。②』

かかる不滿は後のエヂンバラ講演において一層はつきりした形をとつてゐる。

『ストア派の必然への諦念のごとき褐色の、それも色褪せた態度を以て宇宙を受入れるか、或は基督教の聖者のごとき熱情的な幸福感を以て宇宙を受入れるかによつて、感情的にも實に容易ならぬ差違が生ずる。その大きさは受動性と能動性との、又は守勢と攻勢との距りにもひとしいものである。③』

『ストア派の叫びと基督者の叫びとを比較して見ると、その差違が教義の差違よりも遙に大きいものであることがわかる。といふよりも、兩者を分つものは感ずる心持の相違なのだ。④』

なほ、さきの告白にも示唆されてゐるやうにジームズには二種の相異つた內的要求があつた。そのひとつは、常に積極的に働き出ようとする行爲的道德的意志であり、他のひとつは救ひと安らかさへの憧憬であつた。この憧憬の念は、行爲的精神が何等の阻害をも感じてゐない時ですら、一種の豫知としてジェームズの心を占めてゐた。たとへば、『故ヘンリー、ジェームズの文學遺稿』の中で、父ジェームズと自身の性格の相違を『病める魂の一元論』と『健全な精神の多元論』とによつて對照せしめながらも、『我々はすべて、かかる病める魂である。今はそれとさとらないだけなのだ。⑤』とのべてゐるのを見ても、その消息を窺ふことができよう。かかる豫知はやがて、一元論の優越性の認識となつて現れる。

『一元論は病める魂にも敢爲な精神にもひとしく適合する。だが、多元論については誰もかく言ふことはできぬ。その世界はどこまでも負目をもつた世界である。何とならば、そこでは何程かは行き泥む機類があり得るからである。……病める魂の求めは確かに一刻を爭ふものがある。絕對者を信ずるものが、かやうな要求によく相應するところから、その哲學の殊勝をとなへるのは當然である。私の辯護するプラグマチズム或は多元論は、最後までどうにもならない困難、すなはち何一つ確證も保證もなくして生きとほして行くことを肯ぜねばならぬ、といふ困難に行き當らねばならないのである。⑥』

この見解は、エヂンバラ講演の第四乃至七講において更に詳説されてゐる。ここでジェームズのいはゆる多元論と一元論について少しく注意しなければならぬ。

ジェームズの考へによれば、『いかなる道德的立場も徹底すれば多元論となり、いかなる宗教も徹底すれば一元論となる』[7]のである。また、『多元論は道德的精力を十分に使ひこなさうとする場合、我々の誰しもが實際上傾いて行く見地である。』[8]

すなはち、多元論とは自發的實踐的な行爲の立場を、あらゆる固定から純粹に護らうとする精神に外ならない。『多元論的宇宙』において彼は様々な角度からその辯明を試みてゐるが、その說くところは畢竟この精神を出ないのである。それはどこまでも觀念體系ではない。むしろその否定である。[9] 既成の觀念體系に却つて自己疎外を感ずるヒューマニズムの精神である。最もラディカルな行爲の精神である。隨つてまた選ばれたるものの精神でもあるのである。

多元論が、行爲の原理であるのに對して一元論は信仰の原理である。ジェームズが一元論の中にかなり深く他力的性格を讀みこんでゐたことは明かである。

ジェームズは自身の倫理としてはいふ迄もなく多元論の立場に立つてゐた。しかもその眼は一元論のもつ意味をよく洞察してゐたのである。

② R. B. Perry, Thought and Character of William James, Vol. II, p. 353.
③ W. James, Varieties of Religious Experience, p. 41.
④ Op. cit. p. 42
⑤ The Literary Remains of The Late Henry James, p. 118.
⑥ W. James, Meaning of Truth, p. 226-9.
⑦ The Literary Remains of The Late Henry James, p. 118.
⑧ ibid. p. 116.
⑨ その直接性を否定するのである。即ち、『絶對論と多元論との間に存するこの大きな相違は、宇宙の實質的領域の相違を意味しない。それは形式のみの相違からくるのである。』(A Pluralistic Uniuerse, p. 319)

三

ジェームズ自ら語るところに依れば、彼は偉大な神祕家や宗教家に見るやうな神祕的經驗、若くは靈感、神現前の體驗ともいふべきものを有しなかつた。さうしてそ

の理由を自身の素質に歸してゐる。⑩然し彼は或意味で類比經驗（analogous experience）ともいふべきものを豐かに有してゐた。それはやはり神祕的と名づけるに相應しい、日常見聞の域を超えた經驗であつた。たとへば、彼が『漂石にも喩ふべき印象』（boulder of impression）を領得したといふアディロンダックスの森の夜の經驗のごときは、その著しい一例であらう。⑪

また、少し樣子は異るが、彼自身試みた亞酸化窒素服用の結果について興味ある報告をしてゐる。⑫

その他『宗教的經驗の種々』に指摘されてゐるもろもろの神祕的萠芽（mystical germ）卽ち、自然の風物の中に、或は聖典箴言の中に、或は過去の記憶から、突如として開けくる深い意味の會得、神祕の感得のごときは、同時にまたジェームズ自身の經驗であつたのである。彼が高度に發達した神祕主義のみならず、廣汎多岐に亘る人間經驗の成果に深い洞察を示し、かつそれらを可能なる範圍まで透明にし得たのは、やはり思索の基底にかかる神祕的萠芽を用意してゐたからであると考へられる。

⑩ Varieties of Religious Experience, p. 379.

⑪ アディロンダックスはニューヨーク州西北部の山地、森林や湖沼に富んでゐる。一八九八年の夏、ジェームズは、友人と共にこの地方に到り山上の小舍に一夜を過した。その時の心境を次のやうに認めてゐる。

「空は拭ふが如く澄み渡り、一片の雲さへない。風は全く落ちて焚火の煙は一すぢに天を指す。軈て中天に月が上れば、燦めくは大粒の星ばかりとなる。……自分にとつては幸福と孤寂にみちた一夜であつた。」（Letters of William James, Voll. II, p. 211-5 參照）‘boulder of impression’とは未知の原層を窺ふに足る印象の謂であらう。

⑫ Varieties of Religious Experience, p. 387-9.

四

ジェームズは神を感じたとは言はなかつた。アディロンダックスにおける經驗についても、彼はもし人が神を感ずるとすればその折の心境はかくかくであらうといふことを理解し得るやうになつた、と語つてゐるのみである。

靈魂不滅についても同じことが認められる。彼はその可能性を擁護するにとどめてゐる。それは必ずしも彼

自身の不動の信仰ではなく、むしろ次のやうな洞察に裏づけられたものであつた。

『永生について私の關知する最も優れた主張は、子供が正にさうであるやうに永生に値する人間が存在するのだ、といふ主張である。』[13]

彼は自身の死を耐へがたく感ずる人間には屬しなかつた。彼はその營みの中斷されるのを氣にかけないことはなかつたが、それにも拘らず、底には何かの或諦めをたたへてゐた。

『神よ。如何許り私は同じやうに讀み同じやうに書くことを望んでゐることでせうか。かたのつかない仕事が澤山あるので、蕾のままで剪り取られることになりはしないかと心配になつて參ります。』と愬へながらも、『來るものが何であらうと、知るのは神だけだ。』『何事も因緣なのだ。』(Man appoints, God disappoints.) といふ諦念に住することができたのである。[14]

ジェームズは宗教の教義に關する側面を重く見なかつた。新しい合理的宗教にはことごとく失望した。かかる合理的宗教よりは却つて基督教に深い眞實性を認めた。總じて彼は精練された教説よりも素朴な教説に却つて力があるのを認めた。何故ならばそれは、生活と固く結び合つてゐるところがあるからである。ジェームズが重んじたのは、宗教的生活そのものであつた。個性の深所から發する感情であり、行爲であり、經驗であつた。[15] これは彼の宗教論を一貫する立場である、隨所にその主張を見出し得るのであるが、ミス、モースに宛てた書簡中の次の言葉は、その所信を最も率直明確に吐露してゐる。

『今私の取組んでゐる問題は困難な問題です。まづ「哲學」に代つて「經驗」を世の宗教的生活の眞の脊椎として辯護し、次に私の不動の確信、卽ち宗教のそれぞれ特殊の表白はすべて不合理であつたとしても、(私は信條や教説のことを言つてゐるのですが) 尙全體としての生活は、人類の最も大切な機能であるといふことを信じさせたいと思ふのです。』[16]

⑬ Letters of William James, Vol. II, p. 214
⑭ ibid. p. 376
⑮ Varieties of Religious Experience, p. 31
⑯ Letters of William James, Vol. II, p. 127.

五

最後にジェームズが將來に殘してゐる課題に就て私見を述べて見ようと思ふ。

ジェームズは先にも述べたやうに高邁な行爲的、倫理的精神の持主であつた。また、宗教的生活への深い洞察を有してゐた。また幾多の神祕的鑑識を有してゐた。然しながらジェームズの最も卓越した點は、それら個々の特色にあるのではなく、それの上に動いてゐる或根本的な洞察に求めなければならぬ。卽ち感じ、行爲し、體驗する自己を更に會得してゐたところに求めなければならぬ。それは正しく行爲の立場をも超える意味を有するものである。かかる會得は文獻・記錄によつては十分跡づけることができないであらう。また、それは朧氣な直覺以上には餘り出なかつたかも知れない。しかし何等かの仕方でかかる會得を認めなければ、十分にジェームズを理解することはできないやうに思はれる。ことに、宗教的經驗の構造解明に無意識の立場を導入した如き、また多元論的な主張によつて經驗をどこまでも觀念以前のところに位置づけようとしたごときはかかる會得を豫想することによつて初めて首肯し得るものである。

然しながらジェームズが、かかる根本的經驗を、獨自の仕方で發展せしめ得ず、大體の傾向において生の哲學の一翼以上に出でなかつたことも亦事實である。これをその側面に深く掘り下げることこそ、向後に殘された問題であらうと思ふ。

『何事についても、我々のこれと名指され得る經驗は、そのままの經驗（experience that）のほんの一部に過ぎない。さうして兩者の間には何かつながりがあるのだ。私はこれをどこまでも確信する。だがその未顯の部分が何であり、どこにあるかは推し測ることはできない。それに對しては、唯「帳の彼方に、帳の彼方に、より希望を湛へて、しかし他の場合よりは、どこか未審しく、漠然と」と云ひ得るのみである。』

（一九〇八年、C. E. Norton に宛てた書簡中の一節）

附記――身邊の事情から豫告の論文を書き得なかつたことをお詫びしなければならぬ。取敢ずこの數枚の覺書を以て責を塞ぎ、「信念と信仰」については更に後日を期したいと思ふ。